

わたくし学問研究会

世話人：磯部洋明、戸澤幸作、富田直秀

2025.07.16 於 京都市立芸術大学

直接的な経緯

- 2025年5月、富田先生より：「京芸でしかできないこんな学問で***（大型外部資金）申請しよう！」=>以下富田先生から届いた草案より。
 - 私（わたくし）小説など、作者自身を主人公として生活や経験の事実を淡々と述べることによって細やかで奥行きのある心境表現する方法は、日本近代文学に特有の小説の一形態である。それに対して、従来の科学・技術の世界では、私（わたくし）の経験を可及的に排して何が客観的事実であるかを追求することこそが真実を追求する方法論であるとされてきた…中略…私（わたくし）にかかわる経験や細やかで奥行きのある心境を網羅的に表現することによって、客観的事実でありながら、詩情（ポエジー）的な信頼性を担保した科学・技術表現が望まれる。
 - 鷺田清一は、「便利である。より快適になった。が、そうしたシステムに漫然とぶら下がっているうち、「作る」という、生業の基本ともいべき能力を失ってしまった。」と述べて、身体を使って何かを作るところにあった生きることの基本が仮死状態に置かれつつあることを述べている…中略…仮想空間と現実空間にそれぞれ異なる身体を持つ近未来のヒトが、「わたしがわたしである」という自己の確立を持ち、お互いに信頼しあいながら社会との関係性を維持するためには、私（わたくし）を排してきたこれまでの学術・学問の概念の根本的な変更が求められている。
 - 京都市立芸術大学は日本で最も長い歴史を持つ芸術系の大学であり、身体を使った造形・創造の経験の中からのものごとの本質を発見する「身体性」を重視する教育を徹底している大学でもある。その最も象徴的な授業である「総合基礎実技」では、批判、否定という作業の繰り返しによって真実にたどり着こうとする従来の学問的な方法のみならず、それぞれの身体における「実感」から、それぞれの多様な世界観が立ち上がる環境を学生たちに提供している…
- 磯部「おもしろそうっすね」
 - とはいえ外部資金申請はかなり大変。とりあえず手弁当でやれる研究会からやりましょう=>今に至る

今日の予定

磯部洋明「ハンセン病療養所における自然科学的営為とか」

戸澤幸作「哲学対話」

田中ゆり「宇宙と人間の交わる美意識の体験」

前田夢子「壁に絵を描く人びと:ダカールのグラフィティを事例に」

土田亮「「展示でフィールドワークする」とはいかなる思考とイメージ喚起をもたらすか？」

佐藤那央「**Bar**のフィールドワーク」

服部円「ネコとヒトのあわい」

森山徹「モノに心がある、と言わされて」（オンライン）

西江仁徳「動物研究者の見果てぬ夢」

安藤悠太「押し付けない環境配慮と探究活動を探りたい」

玉井尚彦「抽象のしくみ」

乗島修一郎「学際性信奉の光と影」

井出和希「考え中」

宮野公樹「私論！研究と学問の違い」

富田直秀「わたくし学問」

皆さんの学問観とか、芸術と学問の出会いに期待することとか、そういうのを自由に話したいです。

お話はコンパクトめに、質問/議論の時間を確保する方向でお願いします。

趣旨文より

- 本研究会の目的は、制度化された学術研究の中で世に送り出す成果からは取りこぼされてきたものを拾い上げ、そこに新たな価値を見出すことにあります。

芸術大学という場は、このような試みにとても適した場だと、私たちは考えています。芸術に取り組む人々は、対象から様々な価値や機能や意味を見いしたり、一見関連のないものにつながりを見いだすことに長けています。芸術は元々の制作者の意図とは異なる解釈を許し、多様な解釈を引き出すことを積極的に評価します。芸術は、それを積極的に取り入れるにせよ意図的に排除するにせよ、それを制作する人間の身体性を気にかけます。また芸術は、その成果が普遍的に共有されなくとも価値があります。全人類に届くことよりも、むしろ感性を共有する限られた人に深く届けたいと願う芸術家も多いでしょう。誰に見られることがなくともその営為が芸術家本人にとって大きな意味を持つこともあります。そして私たちは、誰にも知られることなく自らのためだけに作品を作り続けた芸術家の営為そのものに深い感動を覚えることがあります。そのような私的な営為を学問は評価できるだろうかということは、本研究会における大事な問いの一つです。

ハンセン病療養所・長島愛生園の気象・天文観測

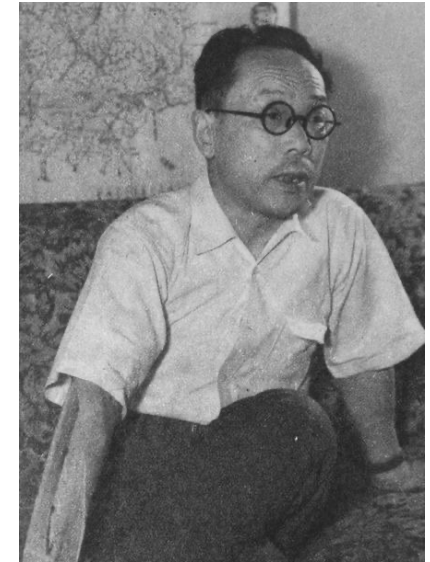


山本一清（京都帝国大学花山天文台初代台長）

「狭い『学术界』のためには、専門家は大切な人であるが、広い『人世』の文化獲展のためにはアマチュアこそ誠に貴重なる存在と言はねばならない」「天文学のためにアタラー生を棒に振って単なる技術者になるよりは、むしろ天文学的教養を経て、明るく正しき『人間性』に還元せん」（天界, 1934）

依田照彦（長島愛生園気象観測所）

私はこの島に一生を終わる運命にあり、生をかけてこのことをやりたい念願です…今後同好の士を募り、この方面の趣味を開拓して園内の一般者にも自然科学に対する関心を昂め、少しでもうるほひのある生活が出来ますれば望外の幸せと存じています。斯かる事は、国を賭しての今日の戦の下で、どうかと思われませんが、私共にとっては、無為徒食に堕することなく、何か為すことが、せめてものみ国への御奉公と信じます。（山本への手紙、1942年）



芸術を学ぶ学生たちから聞いた話

子どもの頃から、全力でやりたくないことはたくさんあったけど、やりたいことは何もなかった。唯一、やってて苦ではなく、周りから褒められることがあったのが絵を描くことだったので、芸大に進学した。芸術に制作に取り組んでいたら自分の中に何かが出てくるかと思って大学院まで6年間やってみたけれど、特に何も出てきませんでした。（でもものを作ることはつづけている）

特に表現したいことがあるわけじゃない。正直アートをやりたいとは思わない。絵を描くのはとても好き。

（版画専攻を選ぶのはどんな人？と聞かれて）油絵と違って終わりがいいですね。いつまでも描き込めるので、自分でやめるときをきめなきゃいけない。版画は、版をつくって、刷り上がったら「もう完成！」という瞬間、ある種の潔さがある。そういうのが性に合う人が来ますね。

絵画は時間かければいい作品になるというわけでもなくて、短い時間でささっと描いた絵が高評価だったりする。陶磁器は最後に窯に入れて自分の手を離れたところで作品が完成する感じがある。漆は、自分が手をかければかけただけそれに比例して作品が良くなる。それが良かった。